



## 27、多久定住を決める

——趙勇さんの今の家は、1階が王艶さんの中華料理店「大清花」になっていて、2階がお住まいですね。これはいつ建てられたのですか。王艶さんが中華料理店を始めるというのも大変な決断だったのではないですか。

平成15年・・・そうです。王艶さんもなんとか日本の様子がわかるようになり、子どもたちのことやこれから先のことを二人で話し合いました。

王艶さんは、多久に定着するなら中華料理店を開き、ここを拠点にして頑張りたいとのことでした。彼女は前にも話したように、料理をするのは好きで得意にしていました。中島会館にいるときから中華と和食の味付けで、日本人の口に合う料理などいろいろ試していました。

そのためには、拠点となる家と店が必要です。当時は厳しい状況でしたが、銀行のローンを組んで、二人とも頑張ろうと決断しました。

そこで早速、適当な場所・土地を探しました。北多久町高木川内にもともと田んぼだったところで、広く整地されて売り地となっていたところがありました。道路に面したその一面を買うことにしました。その当時、周りには1軒の家があるだけで、広々と田んぼが見渡せるような所でした。少し先には、アパートや学校やほか弁屋もありましたので、なんとかここで店を開くことを決めました。(今では、周りにも沢山家ができました。)

平成15年1月に多久市の秀島建設に依頼して、8月に着工しました。2階建てで、1階を店にして2階を住まいとしました。当時は、長男は就職したばかりで福岡に住んでいました。次男は緑ヶ丘小5年生でした。

——念願の王艶さんの店もできたのですね。

16年4月1日、中華料理店「大清花」をオープンしました。それからもう今年で11年目、12年目に入ります。早いですね。あっという間に過ぎてしまいました。

そのころは、多久市や近隣の町にも中華料理店はありませんでしたので、多久以外のところからお客さんが来てくれました。佐賀市からのお客さんもありました。

王艶さんの料理も最初のころは、日本人の口に合うように工夫しながらも、つい油などを多く使い、中国的な味になってしまうこともありました。その後いろいろと工夫を重ねて、王艶さん独特の味の中華料理を作り出しました。日本人にも好評でした。

餃子にしても、前にも話したように、中国の餃子は皮が厚いと言われる。(中国は水餃子が中心。)日本の餃子は皮が薄い。王艶さんはその中間の厚くなく薄くない、更には中の餡(あん)も工夫して日本人にもおいしいといわれる餃子を作りました。全て手作りです。これはお客さんには大好評で、遠くから定期的買いに来てくれる人もありました。

— 私たちもよくお世話になります、普通の食堂形式の部屋と円卓を囲んで宴会ができる部屋がありますね。これもいろいろ工夫されたのでしょうか。

この店内の作りは大変考えました。料理の味と一緒に雰囲気全てで中国を味わってもらえるような工夫を考えました。そこで、店内の調度、食器、テーブル、椅子など全て中国から取り寄せました。また、音楽が流せるように音響装置も備えました。私の演奏曲とか中国の音楽が食事をしながら楽しめるように工夫しました。

(ちょうどこの対談をしているとき、趙勇さんの携帯電話が鳴り、ちょっと中断して趙勇さんの対応が終わるのを待ちました。)

王艶さんからの電話で、今日は冷蔵庫を新しく買うため、家電店に見に行く予定だったが、いつごろ帰って来ますかとの電話であったとのこと。

もう11年使い続けてきた店の営業用の冷蔵庫が不具合になって、修理しなければならないが、このまま修理して使っても電気代が高い(月2万円程)。この大きな営業用でなくても大型の家庭用冷蔵庫で間に合うのではないかと考えた。今の家電は省エネ仕様になっているので、電気代も節約できるのではないかと考えた。こんなことで、冷蔵庫を見に行くことにしているとのこと。

— そういえば、店の入り口には対の大きな石彫りの獅子(?)が鎮座していますが、これも中国から取り寄せたのですか。お店に入る前から中華気分になるように……。

そうです。大理石の獅子です。中国では店に限らずいろんな建物の玄関にはよく獅子が置かれています。悪いものが家の中に入らないようにするためです。

この獅子も含めてほとんどの物を中国で買って送りましたので、運賃が大変高くつきましたね。

— もう11年以上も営業を続けてこられたというのは、多久の中華料理店としてしっかり定着したのですね。

そうですね。王艶さんも頑張ったし、私も応援してきました。なじみのお客さんもできて、なんとか今日までやって来られました。多久日中友好協会や会員の皆様方の応援もありました。遠くからのお客さんもありますが、経営面ではやはり厳しいところもあります。冷蔵庫の電気代でも節約をしたいのです。

今、次男が大学3年生(日体大、ハンドボール)で、あと2年位は経済的にも応援しなければなりません。王艶さんは中華料理で、私は演奏活動で、今は二人とも明るい気持ちで頑張っています。

## 28、多久日中友好協会の活動の中で

### —中国民族芸能の導入—

— 趙勇さんは多久に来てからずっと多久日中の活動にも参加してこられたし、また積極的にリードしてこられた面もありました。20年以上の多久日中の中で、心に残る活動とか、出来事とか、人と

かありましたら話してください。

うーん、たくさんの方にお世話になりました。もう亡くなられた方もいらっしゃいます。

すぐ頭に浮かぶのは不二見達朗先生（元多久北部中学校校長）のことです。不二見先生には多久に来た最初のころからお世話になりました。孔子廟をはじめ、多久のことについて大変詳しくて、多くのことを教えてもらいました。文化連盟の会長もされたと思いますが、多久の人々を愛し、多久の文化レベルの向上を念じておられたように思いました。

後に体調を崩されて入院されたところにお見舞いに行きました。病室に入ってびっくりしました。ベッドから見えるところの壁には、たくさん多久孔子廟の写真が貼ってありました。どこからでも孔子廟が見えて、孔子廟と一緒に居ることで心が落ち着くとのことでした。その後亡くなられましたが、孔子廟を誰よりも心から愛しておられたことがわかりました。

私も多久に来た最初のころから、孔子廟とはいろいろな面に関わってきましたので、孔子廟は私にとっても大事な存在ですね。

——私たち多久日中友好協会の活動も、多久孔子廟（聖廟）を抜きにしては語れません。そして、その活動の中には、いつも趙勇さんが在りました。趙勇さんは財団法人（現公益法人）「孔子の里」に属しておられるので、聖廟はいつも身近にあるのですね。

いままで、多久市の文化的行事や「孔子の里」のイベントなどでは趙勇さんが精力的に関わってきたものがたくさんありますね。いまでは、多久聖廟のお祭り 稷菜（せきさい、春・秋の2回）には欠くことのできない「稷菜の舞」や「腰鼓（ようこ）」、「獅子舞（ししまい）」などもそうですね。

これらはみんな、中国の伝承民族芸能ですね。古くから中国で演奏され、舞い続けられてきているものです。それらの一部を聖廟のある多久でも演じられるようにして、お互いに日中友好交流を深めようということです。

「稷菜の舞」は平成7年からですね。そうです、平成5年（1993年）に以前から孔子廟をとおして交流を続けていた中国曲阜市と多久市との友好都市の締結がありました。その文化交流の一環として「孔子の里」が導入を決めたのです。

——両市が友好都市の締結に漕ぎつけたのは平成5年です。多久市日中友好協会はその10年ほど前から孔子の生誕地・曲阜市とは民間交流に取り組んでいました。この友好都市締結を具体的に市民の目に見えるようにしてくれたのが、この「稷菜の舞」ですね。これを多久で演じるための準備は大変だったと思いますが・・・。

この舞は、曲阜の孔子廟で二千年来舞い続けられて来たものです。これを舞うためには、衣装や道具類も全て中国から取り寄せなければなりませんし、指導者の招聘も必要でした。そのための事前協議や曲阜市との交渉などを何度も経て、やっと実現できたのです。

受け入れ側としては、実際にこの舞を舞う地元の人が必要です。市民や色々な団体に呼びかけて40数名が集まったと思います。そこで、曲阜市から5人の指導者に来てもらい、一か月間ほど実技指導をしてもらいました。そして、秋の稷菜で最初の舞を披露できたのです。

この舞は、曲阜の孔子廟では「孔子舞」と言われていますが、多久では「稷菜の舞」と名付けています。毎年、稷菜では市民によって舞われています。

この「稷菜の舞」より2～3年前に「腰鼓」や「獅子舞」も中国の専門家の指導を受けて、市文化連盟や「孔子の里」により導入されて、今では市民にも親しまれています。（詳しくは、「孔子の里」のホームページにあります。<http://www.ko-sinosato.com/>）

—これら中国の民族芸能を多久に定着させ、今も市民を通しての日中文化の交流が行われているというのは大変貴重なことですね。これには、多久市や多久日中友好協会と共に趙勇さんの尽力があったからのことですね。

いやいや、私も多久日中友好協会の活動には、多久に来た最初から参加させてもらってきました。そのころは、多久には中国と何らかの関わりを持った人たちが、また中国を本当に愛している人たちが沢山いらっしゃいましたね。(今は、もう亡くなられた方も多いたのですが・・・)

だから、私も大変気持ち良く日中の活動には参加できました。その中で、多くの多久市民の皆さんとも知り合いになりました。なんとか多久の皆さんの力になりたいという思いで、この伝承民族芸能の導入にも取り組めたのです。

中国と多久の皆さんが仲良く交流できるのは、この民族芸能だけでなく、もう一つは、今の中国を知ることだと思います。そのためには実際に中国へ行き、自分で中国を見ることだと思っています。これが私の考えです。

#### —日中友好 草の根の旅—

—そうそう、趙勇さんは今まで毎年のように多久市民を連れて中国旅行をしていますね。趙勇さんと一緒に中国旅行をしたという人はたくさんいますよ。多久の人だけでなく、小城や佐賀にも。

そうですね。もちろん私一人でするものではありません。多久市や日中友好協会や孔子の里など、いろいろな団体で中国旅行を計画して、その案内役をつとめてきました。

本当の日中友好は、両方の市民が互いに顔を合わせて、お互いを知ることから始まるのだと思います。そのお手伝いをしてきたのです。

日本人も中国の文化遺産や史跡のことはよく知っていますね。それを実際に自分の目で見て、実感してもらいたいのです。更にまた、そこで暮らしている今の中国人と接することで、中国及び中国人を知り、本当の交流が深まるのだと思います。そんな思いで多くの人たちの中国旅行を案内してきたのです。

—今年も計画されていますね。もうすぐ7月になったら。北京・ハルビン・長春の五日間ですね。

そうです。今、準備をしているところです。そう、私たちの中国旅行では、北京に滞在するときには必ず孔徳懋(こう とくぼう)女史にも会うようにしていますね。

孔徳懋(こう とくぼう)女史は、孔子の直系子孫77代に当たる方で、多久市・多久日中とは平成元年に女史が初めて来多久されてよりの交流が続いています。今までに3回多久に来られました。多久からも機会あるごとに女史を訪問して親交を深めています。今は98歳になられるはずで、北京で元気にお暮らしです。

そんな長い多久とのお付き合いがあるためか、「多久は私の第二の故郷です」というお便りを頂いたこともあります。孔子廟がとりもつ縁です。

—今回も北京に行かれますが、孔徳懋さんにはお会いできますか。

はい。旅程の四日目に女史を囲んでの夕食会を予定しています。みんな楽しみにしています。

—多久日中では、この孔徳懋さんとお付き合いには、更にもう一つ先へ進む経緯があります。詳しく

く話すと長くなりますので、経過だけを言います。

孔徳懋さんは孔子直系子孫77代ですが、79代の直系子孫が確定されたのです。以前は中国におられたそうですが、今は台湾在住で、孔垂長（こう すいちょう）といわれます。この方と4年ほど前に北京で、多久市長も一緒にお会いすることができました。そこで、今後とも孔徳懋さんと同じように多久市・多久日中と交流を続けることを約束したのです。

このような経過を踏んで、この後すぐに「多久市民の翼」旅行団を組んで台北へ行き、孔垂長さんに面会したのです。その後すぐに今度は孔垂長さんが多久を訪問する予定でしたが、これは都合がつかず直前に中止されました。

趙勇さんは、この孔垂長さんとの件では最初から関わり尽力されてきましたね。大変ご苦労だったと思います。

そうですね。いよいよ多久へ初めて来てもらうと言うことで、大変期待をしていました。講演会も予定していましたが、直前に取り止めになって残念でした。今後とも、北京の孔徳懋さんと同様に台北の孔垂長さんとの交流も続けたいですね。

#### ——聖廟と「参列生徒の唱歌」——

——趙勇さんにはこれまでもいろいろなことで骨を折ってもらいましたが、最近のことで心に残っていることがありましたらお聞かせください。

そうですね。これはなんとなく気になっていて、私の心の中では結末が付いてないような感じなのですが……。もう4～5年前からのことですかね。いま、正確に日時は思い出せませんが……。

それは、市内のお年寄りたちが子どもの頃歌っていた歌を、今によみがえらせて歌う取り組みです。孔子廟に関係するものですね。今、分かっているのは「参列生徒の唱歌」という題で、昔の小学生たちが孔子廟にお参りに行くとき歌っていた歌だそうです。今では誰の作詞・作曲なのかも分かりません。

今ではほとんど忘れられていて、何人かのご老人が覚えていて口ずさむことができるということです。当時北部小学校教頭先生であった峯 晋先生がご老人の歌う歌から、歌詞とメロディを聴き取り採譜されたのです。私はその歌詞と楽譜をもらいました。それを今に歌いやすいように前奏、間奏などを入れて一編のピアノ伴奏の曲として編曲しました。その楽譜を再び峯先生にお渡したのです。峯先生はその譜面を中部小へ渡したとのことでした。

その後、中部小では歌われていたそうです。また、中部小校区の老人クラブでも歌われて、ご老人たちは大変歌いやすくなったと喜んでおられました。現在、西溪校の小学生には歌われているそうです。また釈菜のときにはみんなで合唱もしていますね。

——これは大変いい話ですね。昔から多久の人たちは、子どものころから多くの人たちが聖廟にお参りに行っていたということですね。また、そこには聖廟を讃える歌があつて、みんなが口ずさんでいたのですね。

昔から聖廟と地域の人たちの結びつきがあつたということです。また、多久の多くの皆さんがこの歌を口ずさめるようになったらいいと思いますね。私は、この歌を市内の全小学校で、歌えるようにしたらいいのではないかと思いますね。強制はできませんが。多久の音楽の教材として小学生から歌うのです。多久の文化ですよ。

——そう、多久の文化ですね。昔から歌われていて、今は消えかかっている歌を再びよみがえらせて、

更に次の世代に伝えていくのです。

私がこれを編曲するときの思いです。なんとか次の世代にも受け継いでもらいたい。そんな思いで、力を入れて編曲しました。

—ここまでの趙勇さんの話を聞いていると、以前に話してもらった「満族舞曲」作曲のころのことを思い出しますね。これも忘れ去られようとしていた満族の民族音楽を今に甦らせたのですね。趙勇さんの話す熱意も、その時とそっくりで熱がこもっていましたよ。趙勇さんにとっては、やはり音楽に関わることはおろそかにはできませんね。

それはそうと、やはりこの「参列生徒の唱歌」はきちんと整理して残されなければなりませんね。今、どうなっているのかわかりませんが、いつ、だれ（峯晋さん）によって採譜され、だれ（趙勇さん）が編曲したのか、楽譜もそろえておくべきでしょう。

また、この歌の前史も調べられるだけは調べて、元の歌は誰の作詞・作曲だったのか。どのような形で歌われてきたのか等、一つの郷土資料として残しておくべきでしょうね。それは、趙勇さんの仕事ではないけれど。

そう、どこかできちんと整理されて整えておかなければなりませんね。更にこの歌を多久市に広める方法としては、これのCDを作って学校や必要な団体に配ることもできるでしょう。いずれにしても、これは多久の文化として大事にしたいと思いますね。

#### 「趙勇さん大いに語る」終了にあたり

ひとまずこのあたりで趙勇さんの語りに一息入れてもらうことにしました。

趙勇さんご苦労様でした。実は、これまでに文字に起こしてきた何倍ものことを趙勇さんは話してくれました。それを私たち聞き手は、なるだけ時系列を追って趙勇さんの動向がわかるような部分にこだわって記録してきました。趙勇さんには、もっとここに書いてもらいたかったこともあったかと思えます。また、もっと話したいこともあったはずです。

例えば、二人の息子さんたちのことなどは、折々の場面で触れられましたし、また孔子廟、孔子の里、そして多久市のことなど、まだ触れたいことがたくさんあるようでした。更には、毎年行っている中国旅行団の引率などを通して、変わりゆく中国についての趙勇さんの感想なども聞いてみたかったところです。

また、この数年来の日中間のぎくしゃくした関係には、趙勇さんにもいろいろとお考えがあるようでしたが、その件には触れないで来てしまいました。

このように、まだまだ趙勇さん（中国と日本を体験している）には語ってもらいたい、聞いておきたいことも沢山ありますが、あまりに長くなってしまいましたので、ここで終了と致します。

今後機会があれば、趙勇さんの了解を得て、続編を続けたいものだとも思っています。

尾形 節子（多久地区日中友好協会）

犬山 俊郎（小城地区日中友好協会）

（2015. 5. 26）